

# 貫休の詩作と謝朓の像

## はじめに

唐代における謝朓の受容状況を見ると、盛唐の李白、中唐の大曆十才子らによって一時は脚光を浴びるものの、晩唐になると、謝朓はゆかりの土地・宣城に對する言及の中で、あるいは李白との關連から詠じられることが増え、その人物像が個別的に注目されることは少なくなつてゆく。<sup>(1)</sup>

そのような中、晩唐の貫休（八三二—九一二）は、呉越王に封ぜられた錢鏐（在位九〇七—九三三）に次のような詩を獻じている。

錢鏐 自ら呉越の國王を稱し、休 詩を以て之に投じて曰はく、

…滿堂の花 三千の客を酔はしめ、

一劍の霜 十四の州を寒くす。

萊子の衣裳 宮錦窄く、

貫休の詩作と謝朓の像

石 碩

謝公の篇詠 綺霞差づ。…

鏐 諭<sup>つ</sup>げていはく、改めて四十の州と爲さば、乃ち相ひ見ゆべしと。（休）曰はく「州 亦た添へ難し、詩 亦た改め難し。…」と。遂に蜀に入る。<sup>(2)</sup>

『唐詩紀事』卷七十五「僧貫休」

本逸話は從來、「休は性 偏介<sup>へんかい</sup>にして、…飄然として蜀に入る<sup>(3)</sup>」、「休は性 躁急にして、…即日 衣鉢を裹<sup>つ</sup>み袖を拂ひて去る<sup>(4)</sup>」のように、詩句の改變を拒絶した貫休の性格にのみ焦點が當てられ、錢鏐に寄せられた詩本體に對する注目は爲されてこなかった。「綺霞差づ」とは、謝朓を代表する詩句「餘霞 散<sup>あやぎぬ</sup>じて綺を成し、澄江 靜かにして練<sup>ねりぎぬ</sup>の如し<sup>(5)</sup>」を踏まえており、「謝公の篇詠」とは、謝朓に喩えた錢鏐の詩篇を讀えた言である。

對句構造の贊辭において、相手の詩才を稱贊するために謝朓に擬える表現は、中唐以降の官吏の送別詩に數多く見られ、「官は魏公

子に齊しく、身は謝玄暉を逐ふ<sup>(6)</sup>、「新詩は謝守を蹤ひ、内學は支郎に似たり<sup>(7)</sup>」などの作品が例に挙げられる。このような用法の普及は、太守として宣城に赴任した謝朓の經歷と、官吏である自身の境遇とを重ね合わせることで、強い共感が生まれ、地方へ赴く際の感傷を慰める効果があつたためと考えられる。本詩の「萊子の衣裳」「謝公の篇詠」もまた、同様の表現として、数多くある作品の中に埋もれてきた。

しかしながら、ここで注意すべきは、貫休の身分の特殊性である。言うまでもなく、貫休は佛道に歸依した僧人であり、一官吏として謝朓の境遇に共感した中唐の詩人たちとは立場を異にする。貫休の詩を總覽すると、謝朓に言及した作品は他にも数多く見られ、そこには少なからず、詩僧としての貫休自身の文學觀が投影されている。

さらに、錢鏐に詩を獻じた逸話が示すように、貫休は一字の改變も受け入れられないほど、己の詩句に對して強い拘りを持っていた。明の毛晋が、「休公 遍ねく諸鎮帥に謁するも、毎に詩句の合はざるを以て去る<sup>(8)</sup>」と指摘するように、貫休が權力者の庇護よりも詩句を重視していたことは疑いない。これは、ほぼ同時代を生きた詩僧・齊己が「早梅」詩を鄭谷に見せた際に、「前村 深雪の里、昨夜 數枝開く」の「數枝」を「一枝」に改めるよう提言され、卽座に一字を改め、鄭谷を「一字師」と敬拜したことと比べて、極めて對照的である。このように、貫休が一字一句に心血を注ぐ詩人であつたと

すれば、なおのこと、詩中で頻繁に取り上げられる謝朓は、貫休にとって特別に敬意を表すに値する詩人であつたことが推測されよう。唐の文宗から哀帝まで、そして梁の太祖の治世を経験し、晩唐から五代にかけての混亂期を生きた詩僧・貫休が、同じく南齊末の政亂をくぐり抜けた謝朓をどのように評價し、解釋したのか。本稿では、貫休の詩風と創作態度について分析した上で、貫休詩に詠じられた謝朓の像を明らかにし、晩唐における謝朓受容の一側面に光を當てたい。

## 第一節 貫休の作詩の精神について―人品の「清」

後人の傳によれば、貫休の出生は「家は儒素を傳へ、代は簪裾<sup>しんきょ</sup>を繼ぐ」であり、七歳時に出家し、十五・六歳のころには、「詩名 益著<sup>ますます</sup>れ、遠近 皆聞こゆ」であつたという。<sup>(9)</sup>ここでは、貫休詩にあらわれた謝朓の像を見る前に、貫休の詩風とその創作態度について見ていきたい。

現存する貫休の作品の總數は七百三十五首にのぼり、そのうち、詩人の特徴が色濃く反映されているものは、大きく社會批判を主題とする作品と、「詩を詠じること」について詠じた作品の二種に分類することができる。はじめに、次の詩を手掛かりとして、社會批判を主題とする作品の特徴を見ていきたい。<sup>(10)</sup>

乾坤有清氣、 乾坤 清氣有り、  
散入詩人脾。 散じ入る 詩人の脾<sup>ひ</sup>。  
聖賢遺清風、 聖賢 清風を遺し、  
不在惡木枝。 惡木の枝に在らず。  
千人萬人中、 千人萬人の中、  
一人兩人知。 一人兩人知る。…

「古意九首・其四」

首聯は作詩の動機として、天地の間に漂う「清氣」、すなわち澄み切った清らかな氣が、詩人の臟腑に染みわたってゆく、と描寫する。古の聖賢が遺した「清風」、すなわち高潔な人品、氣質は決して惡事に染まることはないが、古人の遺風を受け繼ぐことは極めて得難く、誰にでも爲し得ることではない。「清氣」が詩人の身體に入るといふ表現は、他にも「河薄く星疏らにして雪月孤なり、松枝の清氣肌膚に入る。因りて知る 好句の金玉に勝るを、心極り神を勞するも 特地無し」<sup>(11)</sup>があり、貫休にとつて、良い作品を作るために必要不可欠な現象と考えられた。

貫休にとつて、古人の遺風を引き繼ぐ詩人となる、ということとは、詩經に見られるとされる「美刺」の傳統を繼承することを意味していた。「學びて毛氏の詩を爲し、亦た直致の言多し」<sup>(12)</sup>、「文を爲すに諷諫に攀<sup>よ</sup>づ、道を得ること毫釐に在り」<sup>(13)</sup>などの詩句が示唆するように、貫休は作詩に諷諫の精神を求めており、また多くの逸話と詩句

がその思想を裏付けている。たとえば、荊南王・高季興（在位九一二—九二八）のもとを訪れた際に、その吏治に失望した貫休は、「脂を掠め肉を幹らす」<sup>(14)</sup>という過激な表現を用いて官吏を非難し、高季興の怒りを買ったという。後に貫休は蜀の王建に庇護を求めるか<sup>(15)</sup>、王建の來賓を諷刺して、「錦衣 鮮華 手づから鵲を擎ち、閑行 氣貌 輕忽多し。稼穡の艱難 總じて知らず、五帝三皇 是れ何物ぞ」<sup>(16)</sup>と詠じ、その結果、「貴幸 多く怨む者有り」であつたという<sup>(17)</sup>。

惡吏を唾棄するような作品において、描寫が極めて過激であつたことも、貫休詩の特徴の一つであり、後人に「貫休の詩は奇思奇句にして、一つに天從り墜ちて得たるに似たり、奈<sup>いかん</sup>ともする無く村<sup>そん</sup>を發し、忽ち惡罵を作す。人をして受くるに堪えざらしむ」と酷評されるほどであつた<sup>(18)</sup>。

貫休と交遊のあつた吳融（生没年不詳）は、「西嶽集序」の冒頭で「善を善<sup>よ</sup>みすれば則ち之を頌美し、惡を惡めば則ち之を風刺す」と貫休を評し、さらには李白・白樂天の批判精神と諷諭の作風を受け繼ぐ人物として、貫休を位置付けている<sup>(19)</sup>。『西嶽集』は貫休の在世中に編まれているため、貫休自身にも太白・白樂天の後を追う意識があつた事は想像に難くない。

詩友であつた杜荀鶴は貫休を評して、「贈休禪和」詩の中で以下のように詠じている。

爲僧難得不爲僧、 僧<sup>た</sup>爲るも 僧<sup>た</sup>爲らざることを得難し、

僧戎僧儀未是能。

僧戎僧儀未だ是れ能はず。

(中略)

祇道詩人無佛性、

祇だ道ふ詩人に佛性無く、

長將二雅入三乘。

二雅を將て三乘に入るに長ずと。

貫休は僧侶の身でありながら、非凡にも僧侶でないようであり、僧侶が遵守すべき規則も儀禮も眼中にない。…自分には佛性などなく、ただ詩を作ること(二雅)によって、悟りの世界(三乘)へ赴くのだ、と言う。

貫休はただ詩作に耽るだけでなく、古の賢人の遺風を受け繼ぐという明確な意志のもと、詩を以て「頌美風刺の道」を體現しようとしていた。賢人の「清風」が「清氣」となって詩人の身體に入り込む、という發想は、換言するならば、詩人には内面の清廉さ、すなわち人品の「清」が必要とされる、ということを意味している。ここに貫休の理想とする詩人像の一要素を見て取ることができよう。

## 第二節 貫休の理想とする詩人像について

### — 詩句・詩境の「清」

中唐から晩唐にかけて、「詩を詠じる」という行爲そのものが詩の題材となつて定着するようになる。特に孟郊、賈島らは、佳句を求める苦しみを詠じた作品を多く残しており、このような文學的潮

流は廣く「苦吟」と看做されている<sup>(21)</sup>。貫休もこの流れを受けて、「詩を詠じること」について言及した作品を數多く残している。これらの作品を分析することで、貫休が理想とする詩人像が明らかにになるのではないか。はじめに、貫休が尊敬した詩人について詠じた詩句を見ていきたい。

區終不下島、

區終に島に下らず、

島亦不多區。

島亦た區に多らず。

冷格俱無敵、

冷格俱に敵無し、

貧根亦似愚。

貧根亦た愚に似たり。

青雲終歎命、

青雲終に命を歎じ、

白閣久圍爐。

白閣久しく爐を圍む。

今日成名者、

今日名を成す者、

還堪爲爾吁。

還た爾の爲に吁くに堪ふ。

「讀賈區賈島集」

東野子何之、

東野子 何にか之く、

詩人始見詩。

詩人始めて詩を見ゆ。

清剝霜雪髓、

清なること霜雪の髓を剝り、

吟動鬼神司。

吟ずれば鬼神の司を動かす。

舉世言多媚、

世を擧げて言多く媚び、

無人師此師。

此の師を師とする人無し。

因知吾道後、

因りて知る 吾が道の後、

冷淡亦如斯。

冷淡なること亦た斯くのごときを。

「讀孟郊集」

一首目は、賈區・賈島の集を読んで詠じた詩である。兩者を讀える「冷格」という語は、本詩と司空圖詩「天階紫衣を讓り、冷格なること鶴猶ほ卑くするがごとし」に始めて見える用語であり、司空圖詩では圓昉公の品格を讀えるのに用いている。貫休の「題靈溪暢公墅」詩では、「冷格」の二字を顛倒して、「境清く僧格冷し、新たに斬り古林開く。…但だ心をして清淨ならしめ、渠の歲月の催すに従ふ」<sup>(23)</sup>とあり、詩を作る際の心の境地、すなわち「詩境」が「清」であれば、僧の品格が「冷」になる、と説明されている。

二首目の「讀孟郊集」詩に見える「清なること霜雪の髓を剝り」という一句は、孟郊の詩風を、清涼かつ純粹な「霜」「雪」の表層を剝ぎ取った中にある「真髓」に喩えており、「無垢」「清淨」などのイメージを付與している。<sup>(24)</sup>「清剝霜雪髓」の「剝」という字は、道教用語として用いられることが多く、<sup>(25)</sup>内心の雜念を清淨するという意味を持つ。ここでは、孟郊の詩句と、心清らかに詩を詠ずる心情（詩境）を讀えて、「清」と表現していることが分かる。

「冷」「清」という語は、貫休が敬意を寄せる詩人の人品・詩句・詩境に對して爲された贊辭であり、また、同様のイメージを喚起する「玉」「冰」などの表現へと廣がつてゆく。たとえば貫休詩には、他者を賞賛する際の表現として、「直ちに須らく詩玉に似るべし、

用ひず力山の如きを」<sup>(26)</sup>「禪は金鼎の藥を抛ち、詩は玉壺の冰に和す」<sup>(27)</sup>などの用例が見られるが、「詩玉に似たり」「詩は玉壺の冰に和す」はいずれも、詩句が透き通つていて混ざり氣がない、純粹無垢なものである、という意味である。また、貫休は自身が理想とする詩句について言及する際も、「髮豈に端無く白く、詩須らく世を出でて清なるべし」<sup>(28)</sup>、「詩は清くなりて後に到ると雖も、人は更に前より瘦す」<sup>(29)</sup>と詠じており、詩の完成度に「清」が必要不可欠であると考えていたことが分かる。

次に、詩作の苦しみを詠じた作品を見ていきたい。「懷匡山山長二首・其二」では、妙句を得ることの難しさを「句を覓むるに曾て虎に衝く」<sup>(30)</sup>と表現しており、これは皎然の『詩式』卷一「取境」に見える、「理想とする詩境を入手し、佳句を得るためには、苦境に身を置かなければならない」という發想に基づく。<sup>(31)</sup>詩句を得ることの難しさを詠じた作品には、他に以下のようなものがある。

斯の文如し未だ精ならざれば、歸山して更に探討せん。

「上雇大夫」

新詩將に出でず、往往にして僧乞ひて得。

「書陳處士屋壁二首・其二」

十載獨り扉を扃ざし、唯だ爲す二雅の詩を。

「偶作」

端無く句を求めること苦にして、永日壑風吹く。

「秋望寄王使君」

詩を詠じるという行爲は、貫休にとって生活の一部でもあった。

五更に至るまで寢ずに詩句を推敲することあれば（「夜對雪作寄友生」詩…唯だ君のみ心 我に似たり、吟ずること五更鐘に到る）、吟詩が身體の不調を招くこともあり（「秋末閑居作」詩…盡日 詩を吟じて坐し、端無く箇の病成る）、さらには、詩句への執着によって、時折、死後の世界と精神が交わることさえあったという（「贈鍾陵陳處士」詩…高吟 千首 精怪動く、長嘯 一聲 天地開く）。また、貫休が自ら「僧家 詩を愛し 自ら拘束す」（「龔光大師草書歌」と述べるように、艱苦な環境で詩を作り上げる行爲そのものもまた、一種の精神的な鍛練と看做されていたようである。こうして、苦しみの中に、理想とする詩境と詩句の「清」が達成された結果、「句を得るに先づ佛に呈り、此の心を知る人無し」と詠じるような、納得のゆく詩句が誕生するのである。

ここで今一度、冒頭に舉げた錢鏐に詩を獻するの逸話を振り返ると、わずか二字とは言え、貫休にとって詩句の改變が如何に耐え難いことであつたのか、明確に理解されよう。

第一節・第二節の分析により、貫休詩の特徴として、人品・詩境、そして詩句に對して「清」という境地を追求する精神が貫かれていることが明らかになった。この點を踏まえた上で、貫休が謝朓をどのように認識し、詩中に詠じていたのか、見ていきたい。

第三節 貫休詩にあらわれた謝朓の像

貫休詩のうち、謝朓について直接言及した作品として、「I 歸東陽臨岐上杜使君七首・其一」「II 秋末寄上桐江馮使君」「III 寄馮使君」「IV 寄杭州靈隱寺宋震使君」「V 上馮使君水晶數珠」の五篇を取り上げて、順次分析を行いたい。

【I】

歸東陽臨岐上杜使君七首 其一

東陽に歸り岐に臨み杜使君に上る七首 其の一

小謝清高大謝才、

小謝の清高 大謝の才、

聖君令泰此方來。

聖君 泰をして此方に來たらしむ。

一從到後常無事、

一從 後に到れば 常に事無し

鈴閣公庭滿綠苔。

鈴閣 公庭 綠苔滿つ。

【II】

秋末寄上桐江馮使君

秋末 桐江の馮使君に寄せ上る

山東山色勝諸山、

山東の山色 諸山に勝り、

謝守清高不可攀。

謝守の清高 攀<sup>よ</sup>づるべからず。

薄俗盡於言下泰、

薄俗 盡くるに言下の泰に於<sup>お</sup>てし、

苦心唯到醉中閑。

苦心 唯だ到る 醉中の閑。



香凝錦帳抄書後、

香 錦帳に凝る 書を抄すの後、

月轉棠陰送客還。

月 棠陰を轉めくらせて 客の還るを送る。

野客霑恩歸未得、

野客 恩に霑うづほいて歸ること未だ得ず、

蕭蕭霜葉滿柴關。

蕭蕭たる霜葉 柴關に滿つ。

一首目では杜使君を謝朓の「清高」、謝靈運の「才」と評價し、

二首目は馮使君を「謝守＝謝朓」に喩え、やはり「清高」と稱賛している。『全唐詩』における「清高」の用例は貫休の四首が最多で

あり、他に「清高なること玄度を慕い、宴默なること道一よに攀よつ」、

「飛錫崆峒を下り、清高なること世に少雙34なり」の二首がある。前者では會稽山に隱棲した東晋の許詢（字玄度）を、後者では廬山の

禪僧を褒め稱えており、いずれも世俗から離れた場所に身を置く高潔な人物の人品を意味している。【Ⅰ】【Ⅱ】においても同様の意味

合いで「清高」の語が用いられているとすれば、貫休は杜使君・馮

使君の兩者を假託させた「謝朓」の中に、「清高」という特性を見

出したことになる。貫休の身分を考えれば、世俗を離れた存在とし

て第一に思い起こされるのは僧人であるが、それでは貫休は謝朓の中に、佛教的な超俗性を見出していたのだろうか。

晩唐當時、江南は僧侶の集まる聖地として人々に認識されていたため、南朝詩人が（地理に基づく印象から）佛教的な超俗性を付與

されて、詩に詠じられるようになることも、あるいは自然の成り行きであるように思われるかもしれない。<sup>36</sup>しかし、單に佛教の超俗性

を表現したのであれば、謝朓である必然性はない。例えば、釋慧

遠と交友關係にあり、またみずからも頓悟説を提唱し、『大般涅槃

經』三十六卷の譯業を成し遂げるなどの功績を遺した謝靈運（三八

五―四三三）を以て、杜使君・馮岩を形容する方が、はるかに妥當

であろう。謝靈運とは異なり、謝朓には佛教にまつわる個別的な逸

話は一切ないのである。それでは、貫休は謝朓のどのような側面に、

人品の「清高」を感じ取ったのか。【Ⅲ】【Ⅳ】の詩から、その手掛かりを探りたい。

### 【Ⅲ】

寄馮使君

馮使君に寄す

端居碧雲暮、

端居 碧雲暮れ、

好鳥啼紅芳。

好鳥 紅芳に鳴く。

滿郭桃李熟、

郭に滿ちて桃李熟し、

卷簾風雨香。

簾を卷きて風雨香る。

清吟繡段句、

清吟す 繡段の句、

默念芙蓉章。

默念す 芙蓉の章。

未得歸山去、

未だ山に歸り去りて、

頻升謝守堂。

頻りに謝守の堂に升るを得ず。

本詩は八七三年、貫休四一歳の時の作。當時、睦州の太守を務めていた友人・馮岩に寄せた詩である。馮岩の住まいのあたり、青空

に掛かる雲は次第に暮れ、紅い花のそばでは小鳥が囀る。桃や李の

果實はいたる所に熟し、簾を捲れば風雨を豫感させる匂いが漂う。

あなたは澄んだ聲で美しい詩句を吟詠し、かの孟郊が綴ったという

芙蓉の章について深思していることだろう。<sup>(37)</sup>そして最後の一聯では、

「未だ山に歸り去るを得ず」、すなわち自分はいまだ隠遁できずにいるため、頻繁に謝守（謝朓Ⅱ馮岩）のもとを訪ねることができない、と結ぶ。

「清吟」は「清吟 疾を愈やすべし」<sup>(38)</sup>、「酔ひて清吟の管弦に勝るを聴く」<sup>(39)</sup>のように、「吟詠」を稱賛する際に用いられる語である。『全

唐詩』における「清吟」の用例を見ると、貫休・齊己が各々八例と最も多く、白居易の五例、方干の三例、錢起・陸龜蒙の二例がこれに続く。晩唐を代表する二大詩僧が「清吟」の語を多用した背景には、前節で述べたように、「清」の語に精神の「純粹無垢で雜念がない」様を表すという特別な意味合いが含まれているためであろう。

とりわけ貫休詩では、「清吟 孤り坐す 碧溪の頭」<sup>(40)</sup>のように、専ら孤獨の中で詩作に没頭する様子を詠じる際に用いられているのが特徴的である。本詩では、馮岩の詩篇の清らかさ、詩を詠じる際の境地の清らかさ、そしてそれを成り立たせる周囲の環境の清らかさが「清吟」という語に結びついており、「謝守（Ⅱ謝朓）」はその體現者としてふさわしい人物と看做されている。

續けて、八七七年、貫休四五歳の時の作。

#### 【IV】

寄杭州靈隱寺宋震使君 杭州の靈隱寺の宋震使君に寄す

罷郡歸侵夏、 郡を罷めて侵夏に歸り、

仍聞靈隱居。 仍りに聞く靈隱の居。

僧房謝朓語、 僧房 謝朓の語、

寺額葛洪書。 寺額 葛洪の書。

月樹彌猴睡、 月樹 彌猴睡り、

山池菡萏疏。 山池 菡萏疏なり。

吾皇愛清靜、 吾が皇 清靜を愛せば、

莫便結吾廬。 便ち吾が廬を結ぶ莫かれ。

睦州刺史を罷めて隱居の身となった友人・宋震に寄せた詩である。靈隱寺の僧房に響く謝朓（Ⅱ宋震）の聲、そして寺に掛けられた葛洪の手からなる扁額。月明かりの中で彌猴は眠り、山池の蓮もまばら。深い靜寂につつまれた靈隱寺に隱居する宋震を「清靜」と讃えながらも、貫休は皇帝の寵愛を強調してその出廬を促す。「清靜」は清らかで靜かである、という意味から、轉じて政治が清廉でつましいことをいい、『老子』の「躁なるは寒に勝ち、靜なるは熱に勝つ。清靜なるは天下の正と爲る」<sup>(41)</sup>を踏まえる。八七三年に僖宗皇帝（在位至八八八）が即位すると、翌乾符元年には王仙芝・黃巢が相次いで反亂を起こして浙東一帯から中原へと兵を進め、八八〇年には洛陽・長安を占據する。世の混亂とは對照的に、靈隱寺にひつ



そりと隱居する宋震の姿を見て、貫休は詩人として憧れる一方で、官吏としての宋震の才覺を高く評價し、盡忠報國をうながす思いで、「便ち吾が廬を結ぶ莫かれ」と結ぶ。

【Ⅲ】【Ⅳ】に共通するのは、地方の長官をつとめる（あるいはつとめていた）友人を「謝朓」に擬えて、その詩句の清麗さを賞賛している点である（「清吟」「謝朓語」。これに加えて、馮岩と宋震はいずれも詩中で、あたかも隱者のように描寫されており、「端居碧雲暮れ、好鳥紅芳に鳴く」「清吟」（Ⅲ）「月樹彌猴睡り、山池菡萏疏なり」「清靜」（Ⅳ）などの語から、ひと氣ない靜かな空間で、心安らかに詩を詠じている情景が想起される。貫休が詩を詠じる際に必要と考えた詩境の「清」、すなわち雜念をとまわず、清らかな心情で詩を吟ずる境地が、この二作品には現れていると言えよう。

南齊當時、政亂に巻き込まれる形で宣城に赴任した謝朓は、太守を務めながらも、現地で隱棲を願う詩を數多く殘しており、いわゆる「吏隱」の鼻祖と看做されている。<sup>(42)</sup>一方、貫休は七歳時に出家した僧人であり、科擧を受けて國政に携わることとは實質不可能であった。しかし、本稿第一節で指摘したように、彼は古の賢人の「清風」を繼承するという意志から、社會批判の精神を以て詩を詠じるだけでなく、積極的に政治・社會に關わりとうとしていたのであって、世を疎んじ、俗世から完全に身を引いた世捨て人ではない。【Ⅲ】で刺史の身でありながら隱者のような生活を送る馮岩を讀み、【Ⅳ】

で宋震の出廬を促していることから、隱者と官吏という二つの身分を兩立する姿こそ、貫休にとって理想像であつたことがうかがえる。

そうであるとすれば、貫休が謝朓の人品を「清高」と形容したのは、謝朓が俗世から一定の距離を保ちたいと願いながらも、官吏としての役目を怠らない人物であつたため、と解釋できるのではないか。實際のところ、謝朓の詩には、隱遁に對する憧憬が讀み取れるもののみならず、良牧としての側面をうかがい知ることが出来るものも多く存在する。宣城の郡政について抱負を述べた「賦貧民田」詩の中で「曾<sup>すなは</sup>是れ共治の情あり、敢て貧病を恤<sup>あは</sup>れむを忘れんや」と詠じるように、謝朓は太守としての責務を十分に自覺し、良き爲政者を目指していた。貫休が憎む、民を虐げる官吏とは、まさに對極の存在であつたと言えよう。

最後に、【Ⅴ】の作品を見ていきたい。

## 【Ⅴ】

上馮使君水晶數珠	馮使君に水晶數珠を上る
冷泠瀑滴清、	冷泠 瀑滴清し、
貫串有規程。	貫串 規程有り。
將諷觀空偈、	將に空を觀るの偈 <sup>げ</sup> を諷 <sup>いそ</sup> めんとし、
全勝照乘明。	全て乘を照らすの明りに勝れり。
龍神多共惜、	龍神 多く共に惜しみ、

金玉比終輕。

金玉比するも終に輕し。

願在玄暉手、

願はくは玄暉の手に在りて、

常資物外情。

常に物外の情を資<sup>なす</sup>けん。

水晶でできた數珠は、竝みならぬ清涼感を湛え、冷やかな手觸

りを備える。これを貫休は、謝朓（玄暉）に喩えた馮岩に差し出す。

最後の句「常に物外の情を資けん」は、水晶數珠が馮岩の持ち物と

なることで、あるいは馮岩が水晶數珠について詠じることで、その

清らかさがに増してゆく、という意味である。佛教において數珠が

極めて重視される物品であることは、贅言を要さない。數珠につい

て詠じる作品は、本詩を除けば、『全唐詩』に四首確認されるが、

謝朓に言及するのは貫休の詩のみであり、貫休が謝朓の人品と詩風

に、清らかな數珠に相應しい清澄さを認めていることはもはや疑い

ない。

謝朓の詩に「清」「明」「輕」など、すっきりした印象を持つ語が

多用されていることはすでに指摘されており、また、『南齊書』が

謝朓について「文章清麗なり」と記載し、李白が「諾は楚人の重き

を謂ひ、詩は謝朓の清きを傳ふ<sup>(46)</sup>」と詠じるように、「清新」「清麗」

は謝朓の詩句に具わる大きな要素と看做されてきた。

このような謝朓の詩句の特徴を踏まえ、その詩境と人品にも「清」

という特性をみとめ、これを高く評價した詩人は、貫休の他に類を

見ない。謝朓像に對するこのような解釋は、貫休自身が理想とする

詩人の姿——すなわち清廉な人品をそなえ、詩句・詩境が純粹無垢な詩人——に裏付けられて爲されたものであり、同時に、南齊末の不安定な情勢において、隱遁に憧れながらも地方の長官としての責務を怠らなかつた謝朓の中に、貫休の考える、晩唐混亂期の官吏のあるべき姿が投影された結果とも言える。

## おわりに

南齊はわずか二十三年の間に七人の帝王が即位しており、謝朓はそのうち六人の治世を経験している。特に明帝による武帝派の肅清は、文學活動の空間と支持者を失うという意味で、謝朓に大きな打撃を與えた。政亂の直後に赴いた宣城で、謝朓は族兄・謝靈運のようにな水に遊びたいという願望を抱きつつも、任期を完し、三十六歳で世を去るまで官職を離れることはなかつた。謝朓が「吏隱」の鼻祖と看做されているということは、同時に、彼が終始「吏」であり續けたことをも意味している。

一方、貫休は唐末から五代にかけて、八人の皇帝の代替わりを経験し、地方官の墮落を目の當たりに行っている。混濁とした晩唐の空氣に求められたのは、まさに人品の「清」であり、詩風の「清」であった。古人の遺風を受け繼ぐ一詩人として、そして作詩に竝みならぬ情熱を注ぐ一詩人として、貫休は謝朓の中に、官吏のあるべき姿と、詩人としてあるべき姿を見出したのである。

晩唐、宣城の詩跡化と「李白による謝朓愛好」という大きな典故に吸収されて、謝朓に對する解釋が次第に通じいつべんのものとなつてゆく中、謝朓像に對する貫休の解釋は極めて特徴的であり、また當時の時代背景をよく反映している。詩僧・貫休に受容されることで、謝朓の人物像はより奥行きのあるものとなつて、後世に語り継がれてゆくこととなる。

#### 注

- (1) 中晩唐における謝朓の受容狀況に關しては、拙稿「中晩唐謝朓接受研究」(漢陽大學『中國言語文化』第三輯、二〇一三年)及び「李白『志在青山』考——謝朓別業の存在をめぐつて——」(早稻田大學中國文學會『中國文學研究』第三十九期、二〇一三年)を參照。

- (2) 『唐詩紀事』卷七十五「僧貫休」…錢鏐自稱吳越國王、休以詩投之曰「貴逼身來不自由、幾年勤苦蹈林丘。滿堂花醉三千客、一劍霜寒十四州。葉子衣裳宮錦窄、謝公篇詠綺霞羞。他年名上凌烟閣、豈羨當時萬戶侯」鏐論改為四十州、乃可相見。曰「州亦難添、詩亦難改。然閑雲孤鶴、何天而不可飛」遂入蜀。

- (3) 宋・釋文瑩『續湘山野錄』…休性褊介…。遂飄然入蜀。

- (4) 元・辛文房『唐才子傳』卷十「貫休傳」…休性躁急…。即日裹衣鉢拂袖而去。

- (5) 謝朓「晚登三山還望京邑」詩…餘霞散成綺、澄江靜如練。

- (6) 韓翃「送李侍御歸宣州使幕」詩…官齊魏公子、身逐謝玄暉。

- (7) 嚴維「贈送崔子向」詩…新詩蹤謝守、內學似支郎。

- (8) 汲古閣本『禪月集』序。

- (9) 曇域「禪月集序」…家傳儒素、代繼簪裾。…至十五六歲、詩名益著。

- (10) 本稿で扱う貫休詩はすべて胡大浚『貫休歌詩繫年箋注』(上・中・下)(中

華書局、二〇一一年)に據る。

- (11) 貫休「苦吟」詩…河薄星疏雪月孤、松枝清氣入肌膚。因知好句勝金玉、心極神勞特地無。

- (12) 貫休「古意九首・其二」…學爲毛氏詩、亦多直致言。

- (13) 貫休「寄馮使君」詩…爲文攀諷諫、得道在毫釐。

- (14) 貫休「酷吏辭」…太苛酷、如何如何、掠脂幹肉。

- (15) 『禪月集』序に「岷峨異境、山水幽奇、四海騷然、一方(蜀)無事。遂乃過洞庭、趨渚宮、歷白帝。旋聞大蜀開基創業、奄有坤維、歎曰、不有君子、寧能國乎」とある。

- (16) 貫休「公子行三首・其一」…錦衣鮮華手擊鸛、閑行氣貌多輕忽。稼穡艱難總不知、五帝三皇是何物。

- (17) いずれも『唐詩紀事』卷七十五「僧貫休」より。

- (18) 明・胡震亨『唐音癸籤』卷八…貫休詩奇思奇句、一似從天墜得、無奈發村、忽作惡罵。令人不堪受。

- (19) 吳融「西嶽集序」…夫詩之作、善善則頌美之、惡惡則風刺之。苟不能本此二道、雖甚美、猶土木偶不主於氣血、何所尚哉。…國朝能爲歌爲詩者不少、獨李太白爲稱首。蓋氣骨高舉、不失頌美風刺之道焉。厥後、白樂天諷喻五十篇、亦一時之奇逸極言。…太白・白樂天既歿、可嗣其美者、非上人而誰。

- (20) 齊己「荊門寄題禪月太師影堂」詩…西嶽千篇傳古律、南宗一句印靈臺(原注…太師有「西嶽集」三十卷、盛傳於世)。また、吳融「西嶽集序」に「丙辰、餘蒙恩詔歸、與上人別。袖出歌詩草一本、曰『西嶽集』、以爲贖災」と記載されている。

- (21) 「詩を詠じる」ことを主題とする詩の流行に關しては、岡田充博「中晩唐期に見られる詩文學への没頭的風潮について——詩人達の文學的自覺の問題を中心として」(名古屋大學文學部『名古屋大學文學部研究論集』七十六號、一九八〇年)に詳しい。「苦吟」という語の意味の變遷に關しては、坂野學「苦吟」について」(東北大學中國文史哲研究會『集刊東洋學』第

五四號、一九八五年)に詳しい。

(22) 司空圖「贈圓昉公」詩…天階讓紫衣、冷格鶴猶卑。

(23) 貫休「題靈溪暢公墅」詩…境清僧格冷、新斬古林開。…但使心清淨、從渠歲月催。

(24) 貫休が孟郊の詩をことさら雪に喩えるのは、孟郊の詩において、雪という存在が特別な機能を果たしているからであろう。詳しくは中木愛「孟郊の〈苦吟〉の様相―「雪」の語を手がかりとして」(中國中世文學會「中國中世文學研究」五十七號、二〇一〇年)を参照されたい。

(25) 晩唐の詩僧らが道教上清派の影響を色濃く受けていたことは、李乃龍「中晚唐詩僧與道教上清派」(《陝西師範大學學報》第二九卷、二〇〇〇年)などの先行研究によって指摘されているが、貫休も例外ではない。道士との交遊(「宿赤松山觀題道人水閣兼寄郡守」詩、「秋夜玩月懷玉霄道士」詩など)のみならず、「氣養三田傳未得、藥非八石許還曾」(「送道友歸天臺」詩)のように、上清派の提唱する呼吸法などに對しても強い関心を抱いていたことが分かる。

(26) 貫休「送陳秀才赴舉兼寄韓舍人」詩…直須詩似玉、不用力如山。

(27) 貫休「春晚寄盧使君」詩…禪拋金鼎藥、詩和玉壺冰。

(28) 貫休「早秋夜坐」詩…髮豈無端白、詩須出世清。

(29) 貫休「歸故林後寄二三知己」詩…詩雖清到後、人更瘦於前。

(30) 貫休「懷匡山山長二首・其二」詩…覓句曾衝虎、耕田半爲僧。

(31) 皎然「詩式」卷一「取境」…又云、不要苦思、苦思則喪自然之質。此亦不然。夫不入虎穴、焉得虎子。取境之時、須至難至險、始見奇句。

(32) 貫休「懷武昌樓二首・其二」得句先呈佛、無人知此心(原注…師得句、祇云勸供養佛)。

(33) 貫休「寄杜使君」詩…清高慕玄度、寡默攀道一。

(34) 貫休「送廬山衲僧」詩…飛錫下崆峒、清高世少雙。

(35) 『唐語林』卷二に「李衛公鎮浙西、以南朝舊守多名僧、求知易者、因帖下諸寺、令擇送至府」とあり、同卷四に「江南多名僧」とある。

(36) たとえば晩唐の許棠は、以下のように、謝朓の故郷(實際の故郷である建康もしくは會稽ではなく、宣城の敬亭と誤解する點に注目)を南朝の寺に結びつけて詠じる作品を残している。許棠「寄敬亭山清越上人」詩「南朝山半寺、謝朓故鄉鄰。嶺上非無主、秋詩復有人。高禪星月近、野火虎狼馴。舊許陪閑社、終應待此身」これは、敬亭山と謝朓、そして南朝詩人と佛教という固定のイメージからなされた表現である。

(37) 孟郊「題淮上觀公法堂」詩…且將琉璃意、淨綴芙蓉章。

(38) 李頎「聖善閣送裴迪入京」詩…清吟可愈疾、攜手暫同歡。

(39) 白居易「與夢得沽酒閒飲且約後期」詩…閒徵雅令窮經史、醉聽清吟勝管弦。

(40) 貫休「山居詩二十四首・其二」…誰是言休即便休、清吟孤坐碧溪頭。

(41) 「動きまわれば寒さに勝てるが、静かにしていれば熱さに勝てる。清らかに静かであるものが、天下の長となるのだ」小川環樹譯注『老子』(中公文庫、一九八五年)に據る。

(42) 川合康三「宦遊と吏隠」は以下のように述べる。「…そもそも「宦遊」と「吏隠」とは同一の事態を見かたを代えて捉えたものである。不本意な仕官の身、それを見知らぬ地で轉々とするしがない宮仕えと見れば「宦遊」となり、そこに私的な隱逸の味わいを享受できるものとすれば「吏隠」となる。「宦遊」と「吏隠」とは下級官僚の置かれた境遇に基づきながら表裏の關係にあるのだ」(『中國讀書人の政治と文學』創文社、二〇〇二年)。宣城に赴任する際の謝朓の心情を詠じた「之宣城郡出新林浦向板橋」詩には、「既に祿を懼ふの情を懷ばしめ、復た滄洲の趣に協ふ」とあり、川合氏の定義する「吏隠」の心態が現れている。

(43) 謝朓「賦貧民田」詩…曾是共治情、敢忘貧病恤。

(44) 歐陽詹「智達上人水精念珠歌」、曹松「水精念珠」、皎然「水精數珠歌」、無名氏「天然國胡僧水晶念珠」が挙げられる。

(45) 謝朓詩の「清」という特徴について言及した論文に、向島成美「謝朓詩について」(東京教育大學文學部『東京教育大學文學部紀要』第一〇七輯、

一九七六年、陳慶元「詩傳謝朓清」〔貴州文史叢刊〕第三期、一九八四年）などがある。

（46）李白「送儲邕之武昌」詩…諾爲楚人重、詩傳謝朓清。